

漆川内焼(うすのこうちやき)と霊符焼(れいふやき)

ふたつの幻の焼き物

芦北郡佐敷町の漆川内焼と八代市妙見町の霊符焼は、江戸時代の肥後で焼かれた幻の焼き物です。漆川内焼は、オリーブグリーンの地に白土象嵌を入れた、八代焼によく似た陶器です。一方、霊符焼は、一見しただけでは有田焼とほとんど区別がつかない、藍色の染付けをほどこした磁器です。

このふたつの焼き物については、文献史料、作品がほとんど残っておらず、江戸時代、肥後の陶磁器の中でも幻の存在となっています。

【漆川内焼】

これまでに見出されたわずかな史料によると、

- 1 安永7年(1776)4月、佐敷手永(てなが・肥後の行政単位で、郡と村の中間にあたる)漆川内村の甚平が願い出て焼き始めた。
- 2 天明2年(1782)11月に焼物師3人を雇い入れ、焼き物生産を本格的に推進した。窯の経営者は、甚平から佐敷手永市野瀬村忠左衛門、さらに佐敷町別当の塩谷貞右衛門にかわっている。貞右衛門は、肥前の焼き物(有田焼など)に対抗するという名目で、葦北郡全体の六人の惣庄屋とともに、藩からの融資を申請している。
- 3 窯は当初4軒(4間・焼成室が4部屋)の規模であったが、貞右衛門は6間にしたい旨、申請している。6間にすれば、月に大小千四、五百の焼き物が焼けるであろうと述べている。
- 4 寛政2年(1790)の文書によれば、茶碗、蓋茶碗(蓋付きの茶碗)、皿、徳利といった日用の器が焼かれている。

ことなどが知られます。

展示中の陶片は、昭和41年に研究者の手により表面採集されたものです。現在、葦北町教育委員会が、窯跡の発掘中です。漆川内焼の象嵌は、おそらく八代焼の技術を取り入れたものと考えられますが、これらについては今後の研究が待たれるところです。

【霊符焼】

旧肥後藩領では数少ない磁器の窯である霊符焼については、天草高浜(天草郡天草町)の庄屋である上田家の文書に、わずかに関連史料が知られるだけです。それには、次のようなことが書かれています。

高浜の庄屋である上田家では、村の振興のため、肥前の技術と豊富な陶石(天草陶石、磁器の原料で、日本で最高品質のもの)を利用して、江戸時代中期、18世紀の中ころから磁器の生産を始めていました。製品は、遠く関西など各地に送られています。経営上の利便を考えて、肥後藩領内(当時の天草は天領で、肥後藩領ではない)での活動拠点を探していました。

上田家の当主宜珍(よしうず)が、たまたま、熊本城下に行ったとき、藩士で、著名な博物学者でもあった藤井源兵衛に出会い、八代宮地村に良い陶器土があることを知らされました。実際に行って見たところ、良い土に思えたので持ち帰り、試し焼きしたらうまく行きました。天草の原料、職人を提供するので、肥後藩からも援助をしていただき、立派な八代での焼き物を完成させたいと、肥後藩の藩校である時習館(じしゅうかん)の教授、藪茂次郎に書き送っています。

この宜珍の願いが聞き届けられたかどうか、いまのところそれを記した史料は見つかっていませんが、おそらく、この一件の結果、八代で焼かれたのが霊符焼だったのではないかと思います。

江戸時代の後期、肥後には有名な網田焼(おうだやき)が、おなじく高浜焼の技術で焼かれ、藩窯(藩営の窯)として磁器を焼き繁栄しましたが、肥前の焼き物(有田焼など)との競争に敗れ、わずか数十年で、藩は経営から手を引いています。多分、霊符焼も経営上うまく行かず、短期間で廃窯になったため、記録も製品も残らなかったのではないのでしょうか。

霊符焼については、20年ほど前に地元八代史談会の手によって発掘調査が行われました。現在では遺跡はなくなり、記念の道標が立てられているばかりです。